

落人（道行旅路の花聲）

落人も

見るかや野辺に若草の

すゝき尾花はなけれども

世を忍び路の旅衣

着つゝ馴れにし振袖も

どこやら知れる人目をば

かくせど色香梅が花

散りてもあとの花のなか

いつか故郷へ

帰る雁

まだはだ寒き春風に

柳のみやこ後に見て

気も戸塚はと吉田ばし

墨絵の筆に夜の富士

よそめにそれと影くらき

鳥のねぐらをたどり来る

鎌倉を出でてやうと

此処は戸塚の山中石高道で足は痛みはせぬかや

「何のまあそれよりはまだ行先が思はれて

「さうであるう昼は人目をばはかる故

「幸いこの松かげで

「暫しがうちの足休め

「ほんにそれがよかるうわいなア

何もわけ無きうさはらし

憂きが中にも旅の空

初ほとゝぎす明近く

色で逢ひしも昨日今日かたい屋敷の御奉公

あの奥様のお使ひが

二人が塩谷の御家来で

その悪縁か白猿に

よう似た顔の

錦絵の

こんな縁しが唐かみの

おしの番ひの楽しみに

泊り泊りの旅籠やで

ほんの旅寝の仮枕

嬉しい仲間じゃ

ないかいな

空定めなき花曇り

暗きこの身のくり言は

恋に心を奪はれて

お家の大事と聞いたとき

重きこの身の罪科と

かこち涙に目もうるむ

「よく思へば後先の

弁まへもなく此処迄は来たれども

主君の大事をよそにして

この勘平はとても生きては居られぬ身の上

其方は言はば女子の事死後の弔ひ頼むぞやお軽さらばぢや

「アレまたその様な事言はしやんすか

私故にお前の不忠それがすまぬと死なしやんしたら

わたしも死ぬるその時はアレ二人心中ぢやと

誰がお前を褒めますぞへ

サこの道理を聞き分て

ト先私が在所へ来て下さんせ

父さんも母さんもそれは頼もしいお方もうこうなつたが

因果ぢやと諦めて

女房の言ふ事もちつとは聞いて呉れたがよいわいなア

それ其時のうろたへ者には誰がした

みんなわたしがこころから

死ぬるその身を

長らへて

思ひ直して親里へ

連れて夫婦が身を忍び

野暮な田舎の

暮しには

機も織りそる

賃仕事

常の女子と言はれても

取乱したる真実が

やがて届いて山崎の

ほんに私が

ある故に

今のお前のうき難儀

堪忍してとばかりにて

人目なければ寄り添ふて

言葉に色をや含むらん

成程聞き届けたそれ程迄に

思ふて呉れるそちが親切と先づ立ち越え

時節を待つてお詫びせん

「そんなら聞き届けて下さんすか

「サ仕度しやれ

「アイ

身ごしらへするその所へ

「見付けた才お軽も居るな

「ヤア勘平

「うぬが主人の塩谷判官高貞と

おらが旦那の師直公と

何か殿中で

べつちやくちやくつちやくちやくと話合するその中に
ちいちゃ刀をちよい

と抜いてちよいと斬った科によって

屋敷は閉門網乗物にてエツサツサエツサツサ

エツサツエツサツサと

ほかしてしまふたサアコレ烏鶺翻お鴨をこつちへ

鳩鶺切ひわだ雁だと孔雀が最後

とつ捕めへちやくひつ捕めへちやくやりやあしねえが

返答は

サアサアサツササ勘平返事は丹頂

丹頂とと呼ばわつたり勘平ふつと吹きだし

「よい所へ鶺坂内おのれ一羽で食ひ足らねど

勘平が腕の細ねぶか料理あんばい喰ふて見よエ

大手を拡げて立つたりける

「エ、七面鳥なもちで捕れ

「ドッコイ

さくらとていふ名に惚れて

どっこいやらぬは

そりや何故に

所詮お手には入らぬが花よ

そりやくこそ見たばかり

それでは色には

ならぬぞへ

桃か桃かと色香に惚れて

どっこいやらぬは

そりや何故に

所詮まゝにはならぬが風よ

そりやくこそ愛ない

それでは色にはならぬぞへ

「サこうなつたら此方のもの

耳から斬るか鼻からさこうかエ、モ一層の事に

「アモシそいつ殺さばお詫びの邪魔もうよいわいなア

「へ、もうよいわいなア

口のへらない鶺坂は

腰を抱えてこそと

命からがら逃げてゆく

「彼奴を殺さば不忠の上に重なる罪科最早明け方

「アレ山の端の

「東がしらむ

「横雲に

塀をはなれ鳴くからす

かわいい

可愛いの女夫づれ

先は急げど心は後へ

お家の安否如何ぞと

案じゆくこそ道理なれ。